

# 魯迅『故郷』における発問の研究

教育学研究科 教育実践創成専攻 教科領域実践開発コース 中等教科教育分野 王橋

## 1. 研究動機

まず、「発問」に興味関心を抱いた理由としては、生徒たちに文学作品の魅力を感じさせたいという気持ちがあり、それを感じさせるための、教師の働きかけを考えた際に、「発問」があることを知ったことがある。また、「発問」によって、生徒がその文章に対して、読みが深まるかどうかが決まると感じ、「発問」の大切さを感じたことも挙げられる。

次に、文学作品を選んだ理由としては、主体的・対話的ということを考えたときに、説明文よりも文学作品の方が、多様な意見が出て、主体的・対話的な学びになりやすいと感じたからである。

最後に、文学作品の中でも、『故郷』を選んだ理由としては、大学の卒業論文で、原文と訳文（佐藤春夫、竹内好、井上紅梅）を比較しながら、主に、「は」と「が」の訳者における選択を捉える研究（日本語の特徴に迫る研究）をする中で、『故郷』の訳文に触れていき、『故郷』という作品について魅力を感じ、その魅力を生徒にも伝えたいと思ったからである。

## 2. 研究目的

生徒から多様な解釈が出てきて、それについて生徒自身がもう一度考え、読み深められるようにするためにはどのような発問をするべきかを考え、よりよい発問を構築していくことを研究目的とした。

## 3. 研究内容

多様な解釈が出てきて、それについて生徒自身が考えることができるような発問や、生徒がその文章について、もう一度考え、読み深められるような発問を『故郷』の研究授業において考え、行い、それについて分析していき、よりよい発問を構築していくことを研究内容とした。

## 4. 「発問」の先行研究

「発問」は、生徒がその文章に対して、読みが深まるかどうかを決める教師の働きかけとして大切なものである。石川（2020）は、教師の指導言として、指示、発問、説明、助言の4つを取り上げ、「発問」に対して、「教師から子どもに問いかけること、およびその問いのこと」と定義付けている。また、「発問」の機能として、「発問には、子供の状態を知るために問う機能、教科内容に即して子どもの思考を促し、教師が教えたいものを発見させるために問う機能の2つの機能がある」と述べている。また、「何のために問うのかという教育的意図をもった発問は、子どもの学びを刺激する。授業の狙いに即した発問、発問構成は子どもたちの思考を触発し、それを深めるものとなる」とも述べている。

石川が述べている通り、教師が授業をする際に、「発問」はとても重要なものになってくる。そのために、「発問」には、それぞれどのような種類があり、どのような「発問」が効果的な「発問」なのかを知ること、教師が「発問」を授業の中で、どのように工夫して扱うのかが見えてくると感じる。

小林（2022）は、「発問」の分類について、「基本的には大きく4つの層で発問を考えていくと、深い読みをさせていくことができます。一番上の層は「単元の中心発問」です。当該の教材文を深く読み取るための中心となる発問です。この発問は、単元のはじめに位置づける場合もありますし、何時間か経過した後で提示する方が自然な場合もあります。二番目の層は「単元の中心発問につながる重要発問」です。これは、中心発問を具体的に示したもので、複数の場面に関係するものです。そして、三番目の層が

「各場面を読むための発問」であり、最も具体的な四番目の層が「補助発問・生徒の反応に対する切り返し発問」です。この問いは、時には発しなくても生徒が解を導いていくこともあります。もちろんそうでないときもあるので、教師側は常に懐に持っておく必要があります。」と述べている。

以上の小林の述べている発問の分類に依拠し、本研究では、「単元の中心発問」を①、「単元の中心発問につながる重要発問」を②、「各場面を読むための発問」を③、「補助発問・生徒の反応に対する切り返し発問」を④とし、各発問の後に明示することとした。

また、寺井、伊崎（2015）は、良い発問の条件として、「知的好奇心を喚起する、全員を参加させる、考えが適度に分かれる、論点がはっきりしている、変容や向上が自覚できる」の5つを挙げている。

## 5. 『故郷』について

### 5-1. 『故郷』 基本情報

『故郷』は、魯迅によって書かれ、1921年に雑誌『新青年』で発表されたのち、1923年『呐喊』（辛亥革命前後を主な背景に、中国社会とそこに生きる人間の姿を描いている）におさめられた。なお、『故郷』は、魯迅の自伝的な要素を多く含んでいることが指摘されている。

### 5-2. 『故郷』 概要

主人公の「私」は、2千里の果てから、離れて20年にもなる故郷に帰ってくる。今回の帰郷は、生家の家財を引き払うためであった。実際の故郷は、「私」の思い描いている故郷とは違い、いささかの活気もなかったため、寂寥の感が胸にこみあげてきた。「私」は、少年時代に仲良く遊んでいた、ルントウ（閩土）との再会を楽しみにしていたが、再会したルントウ（閩土）の一言目の「旦那様」という言葉に、身震いし、悲しむべき厚い壁が、二人の間を隔ててしまったのを感じた。しかし、その後、故郷を離れる船の中で、「私」の甥のホンル（宏児）がルントウ（閩土）の五男のシュイション（水生）との再会を約束したと聞き、せめて彼らだけは、自分とルントウ（閩土）とは違って、互いに隔絶することのないようにと「希望」を抱く。

## 6. 研究授業『故郷』 授業実践

### 6-1. 対象校、授業について

対象校は、山梨県内の公立中学校3年生3クラス（70名）で、各クラス5時間、『故郷』中3国語光村図書を教材として授業を行った。

### 6-2. 研究授業を通しての目標

研究授業を通しての目標として、作品の内容や表現から読み取ったことを踏まえ、人間と社会について関心を持たせること。登場人物の生き方の変化や、主人公のものの見方を通して、状況の中で生きる姿を捉えること。主人公の抱く希望について、十分に根拠をもって読解したうえで、自分なりの考えを持つこと。以上の3つを目標とした。

### 6-3. 各時間の授業実践詳細

事前アンケートでは、「文学作品についてどのように感じていますか。」「普段、文学作品を読むことはありますか。ある場合は、その作品名を書いてください。」「特に印象に残っている文学作品は何か教えてください。」「今まで習ってきた文学作品の中で、印象に残っている発問、なぜ印象に残っているのか書いてください。」の4つについて聞いた。

## 1 時間目について

1 時間目は、「登場人物は誰ですか。」(③)を発問した。

1 時間目の授業では、「文章の大枠を捉えることができ、理解することができる」を目標とし、「文章

全体を捉えることができる」ことをねらいとした。

「登場人物は誰ですか。」という発問の生徒の答えとしては、「私」、ルントウ（閨土）、ヤン（楊）おばさん、母。」というものが多かった。

授業を通して、発問が、「登場人物は誰ですか。」だけとなってしまった。その理由として、文を全部通して、音読してしまったために、時間が足りなくなってしまうことがあげられる。そのため、音読をせずに、黙読をさせて、生徒に登場人物に線を引かせるなどの工夫をするべきだと感じた。また、この発問だけではなく、大枠を捉えられるような発問を他にもいくつか用意するべきだったと感じた。

## 2 時間目について

2 時間目は、「20 年前と今で、故郷は変化していますか。」(③)、「20 年前と今でルントウ（閨土）、ヤン（楊）おばさんは変化していますか、その理由を教えてください。」(③)を発問した。

2 時間目の授業では、「20 年前と今の登場人物の変化を捉え、その理由を考えることができる」を目標とし、「私」にとって帰郷がどのようなものだったのか考えることができる」、「時代の特殊性やその社会に生きる人々について考えることができる」ことをねらいとした。

「20 年前と今で、故郷は変化していますか。」という発問の生徒の答えとしては、「もっとずっと良かった」と文章に書いているから、変化している。」「変わっているか、変わってないか分からない。」「もっとずっと良かった、やはりこんなふうだったかもしれない」と文章に書いているから、変化していない。」と多くの生徒が答えていた。ここでは、「私」の心情が変わっていることを読み取ってほしかったので、「故郷自体が変わってないとしたら、何が変わっているのかな。」(④)という発問をしたが、「私」の心情が変化している。」と多くの生徒がきちんと答えられていた。

「20 年前と今でルントウ（閨土）、ヤン（楊）おばさんは変化していますか、その理由を教えてください。」という発問の生徒の答えとしては、「ヤン（楊）おばさんに関しては、ヤン（楊）おばさんは、昔は、おしろいを塗っていて、豆腐屋小町だったが、今は、頬骨が出ていて、コンパスのような姿勢になってしまった。その理由としては、時代の移り変わりがある。」だった。そのため、時代の移り変わり以外に、時代の特殊性を読み取ってほしかったので、「ヤン（楊）おばさんが、今と昔で変わった理由として、時代の移り変わり以外に何かあるか。」(④)という発問をしたが、「分からない。」と多くの生徒が答えていた。また、ルントウ（閨土）に関しては、「昔は、「私」との仲がよく、艶のいい丸顔をしており、血色のいい顔、丸々とした手だったが、今は、背丈が倍になり、顔は黄ばみ、赤く腫れており、手は節くれてしまった。その理由としては、時代の移り変わりがある。」だった。そのため、時代の移り変わり以外に、時代の特殊性を読み取ってほしいというねらいがあったため、「ルントウ（閨土）が今と昔で変わった理由として、時代の移り変わり以外に何かあるか。」(④)という発問をしたが、「風に吹かれる、子だくさん、凶作。」と多くの生徒がきちんと答えられていた。

授業を通して、ルントウ（閨土）のように、繰り返し発問により、該当箇所が出て、生徒の読みが深まったため、繰り返し発問、補助発問を行うことはとても効果的だと感じたが、ヤン（楊）おばさんのように該当場所が分からなかった場合もあったので、この発問をすることで、生徒の読みが深まる場合もあるが、深まらない場合もあると感じた。また、「20 年前と今でルントウ（閨土）、ヤン（楊）おばさんは変化していますか、その理由を教えてください。」という発問において、ヤン（楊）おばさんが、今と昔で変わった理由として、時代の移り変わり以外に、「纏足」という言葉から、時代の特殊性が読みとれることを説明したところ、「纏足」という意味が分からない。」という生徒の意見があったため、「纏足」という言葉の説明から、授業を始めるべきだと感じた。また、「20 年前と今でルントウ（閨土）、ヤン（楊）おばさんは変化していますか、その理由を教えてください。」という発問の理由の部分に対して、多くの生徒が「分からない。」と答え、繰り返し発問を行ったところ、多くの生徒が答えられていたので、

「時代の移り変わり以外で、何かありますか。そのことは何を表していますか。」といった発問の仕方にした方がいいのではないかと感じた。

### 3 時間目について

3 時間目は、「不思議な画面」とあるが、なぜ不思議なのですか。」(②、③)、「不思議な画面」は、主人公の「私」にとって、どのようなものですか。」(②、③)を発問した。

3 時間目の授業では、「回想場面の中にある「不思議な画面」がなぜ不思議なのか、それが主人公の「私」にとってどのようなものかを考え、理解することができる」を目標とし、「この画面が「私」にとって大事なものであり、その画面の中にルントウ（閨土）がいることに気づくことができる」をねらいとした。

「不思議な画面」とあるが、なぜ不思議なのですか。」という発問の生徒の答えとしては、「砂地にスイカが植わっているから。」「チャーがいるから。」「鮮明に残っているから。」「不思議だから。」というものが多かった。答えの中で、「なぜ不思議なのですか。」と問いかけているのに、「不思議だから。」というものが多かったため、「どういうことですか。」(④)という発問をおこなったが、「分からない。」というものが多かった。

「不思議な画面」は、主人公の「私」にとって、どのようなものですか。」という発問の生徒の答えとしては、「ルントウ（閨土）との大切な思い出、ルントウ（閨土）とのイメージ。」と多くの生徒が答えていた。

授業を通して、「不思議な画面」とあるが、なぜ不思議なのですか。」という発問は、「なぜ、不思議なのですか。」と発問をしているのに、生徒が、「不思議だから。」と答えてしまうほど、抽象的で生徒を混乱させるような発問になってしまったと感じた。そのため、「不思議な画面」はどのような画面なのか、どういったものがでてきているのか、またそれは何ですか。」といった基本的な事を抑えたうえで、この発問をするべきだったと感じた。また、「不思議な画面」は、主人公の「私」にとって、どのようなものですか。」という発問は多くの生徒が答えられていたため、よかったように感じた。

### 4 時間目について

4 時間目は、「香炉と燭台はどのようなものですか。なぜ、ルントウ（閨土）は香炉と燭台を望んだのですか。」(②、③)、「私」は、ルントウ（閨土）が香炉と燭台を望んだことについて、どのように感じていますか。」(②、③)、「香炉と燭台の他にルントウ（閨土）は何を欲しがりましたか。なぜそれを欲しがったのですか。」(②、③)を発問した。

4 時間目の授業では、「今のルントウ（閨土）の姿について理解し、過去と今のルントウ（閨土）の姿を比較し、なぜそのような変化が起きたのかを考え、理解することができる」を目標とし、「生活のために奔走している今のルントウ（閨土）を読み取ることができる」、「ルントウ（閨土）の行動に対して、偶像崇拝と軽蔑している「私」も自分の希望に対して偶像と笑っていることを読み取ることができる」ことをねらいとした。

「香炉と燭台の他にルントウ（閨土）は何を欲しがりましたか。なぜそれを欲しがったのですか。」という発問には、「祭具、理由は分からない。」と多くの生徒が答えていた。今のルントウ（閨土）の姿を読み取ってほしかったため、「祭器ということは、誰かを祭っているよね。前の場面で、誰かを祭っていたね。」(④)という発問をおこなったが、「祖先を祭るため。」と多くの生徒が答えていた。

「私」は、ルントウ（閨土）が香炉と燭台を望んだことについて、どのように感じていますか。」という発問には、「偶像崇拝。」「相変わらずの偶像崇拝。」と多くの生徒が答えていた。偶像崇拝がどのような意味なのかを理解してほしかったため、「偶像崇拝ってどういう意味ですか。」(④)という発問をおこなったが、「分からない。」と多くの生徒が答えていた。

「香炉と燭台の他にルントウ（閩土）は何を欲しがりましたか、なぜそれを欲しがったのですか。」という発問には、「皿、大秤、わら灰、理由は生活のため。」と多くの生徒が答えていた。

授業を通して、「香炉と燭台はどのようなものですか。なぜ、ルントウ（閩土）は香炉と燭台を望んだのですか。」という発問において、「香炉と燭台はどのようなものですか。」については分かったものの、「なぜそれを欲しがったのですか。」というところまで、生徒が読み進めることができず、切り返し発問で、多くの生徒が答えられていたので、「祭器はどのようなものですか。どういう場面に出てきましたか。」といった基本的な事を確認する発問をしたうえで、この発問をするべきだったと感じた。

## 5 時間目について

5 時間目は、「不思議な画面」の場面と最後の文を比較して、似ているところと、書かれていないことは何ですか。」(①、③)、「私」の希望は、どのようなものですか。」(①、③)、「希望についてどのように感じていますか。」(①、③)、「私」は最終的に希望をどのように感じていますか。」(①、③)を発問した。

5 時間目の授業では、「私」の希望とはどのようなものなのか、それについて「私」はどのように感じているか考え、理解することができる」を目標とし、「今のルントウ（閩土）は、「私」が不思議な画面で抱いているイメージのルントウ（閩土）ではなくなったことに気づくことができる」、「私」の希望が自分自身ではなく、他人（若い世代）に対する希望であり、その希望は、笑えるものであることに気づかせる」ことをねらいとした。

「不思議な画面の場面と最後の文を比較して、似ているところと、書かれていないことは何ですか。」という発問には、「似ているところは、砂地、紺碧の空、金色の丸い月、書かれていないことは、ルントウ（閩土）、チャー。」と多くの生徒が答えていた。「不思議な画面」が「私」にとっての大切な思い出であることに着目させたかったため、「チャーとかは、ルントウ（閩土）と「私」との何だろう。」(④)という発問をおこなったが、「大切な思い出。」と多くの生徒が答えていた。

「私」の希望は、どのようなものですか。」という発問には、「私たちの経験しなかった生活、手に入りにくいもの、あるものともいえぬし、ないものともいえないもの、無駄の積み重ねで魂をすり減らす生活を共にすることは願わない、打ちひしがれて心が麻痺する生活を共にすることも願わないもの。」と多くの生徒が答えられていた。主語が「若い世代」であることに着目させたかったため、「無駄の積み重ねで魂をすり減らす生活を共にすることは願わない、打ちひしがれて心が麻痺する生活を共にすることも願わない。」の主語は誰だろう。」(④)という発問、「希望の主語は普通だったら、誰だろう。例えば、志望校に受かる、テスト 100 点取るなどの場合。」(④)という発問を行ったが、「若い世代」、「私。」とそれぞれ多くの生徒が答えていた。

「希望についてどのように感じていますか。」という発問には、「手製の偶像、偶像崇拝。」と多くの生徒が答えていた。希望について「私」が最初、どのようにとらえているのかに着目させたかったので、「希望について、マイナス、プラス、肯定的、否定的どちらで捉えていますか。」(④)という発問をおこなったが、「マイナス、否定的。」と多くの生徒が答えていた。

「私」は最終的に希望をどのように感じていますか。」という発問には、「もともとあるともいえぬし、ないものともいえない、地上の道のようなもの。」と多くの生徒が答えていた。希望について「私」が最終的に、どのようにとらえているのかに着目させたかったので、「希望について、マイナス、プラス、肯定的、否定的どちらで捉えていますか。」(④)という発問をおこなったが、「プラス、肯定的。」と多くの生徒が答えていた。

授業を通して、「私」の希望は、どのようなものですか。」というところに、「最終的に「私」は希望をどのように考えていますか。」ということについて書いている生徒もいたため、具体的に何ページまで

ということを指定し、筆者が希望に対しての捉え方が変わっている点についてはっきりわかるような工夫をするべきだと感じた。

### 事後アンケートについて

事後アンケートは、「文学作品についてどのように感じていますか。」「『故郷』の授業の中で、この発問が良かったという発問はありますか。それはなぜですか。」「授業でした発問を通して、『故郷』に関する読みは深まりましたか。どういったところが深まりましたか。具体的に書いてください。」の3つについて聞いた。発問の研究のため、2つめ、3つめの発問に関する項目について、生徒の意見を以下に述べることにする。

生徒の意見として、2時間目に行った「20年前と今で、故郷は変化していますか。」という発問に関して、「変化しているのが景色だけでなく、周りの人や「私」の心情も変わっているところがおもしろかった。」という意見があった。また、「20年前と今でルントウ（閩土）、ヤン（楊）お婆さんは変化していますか、その理由を答えてください。」という発問に関して、「変化がまとめられてわかりやすくなった。」「20年という長い年月で人はどれだけ変わるのかということ、環境の変化などを読み取ることができた。」「ヤン（楊）お婆さんとルントウ（閩土）が変化したところ、その理由が詳しくわかり、深く理解できた。」という意見があった。

次に3時間目に行った「不思議な画面」とあるが、なぜ不思議なのですか。」という発問では、「抽象的で分かりにくく、考えさせられた。」「この部分が一番読み取りづらかった。」という意見があった。また、「不思議な画面」は、主人公の「私」にとって、どのようなものですか。」という発問では、「私」が昔の思い出を大切にしていることが考えることで伝わってきた。」という意見があった。

次に4時間目に行った「なぜ、ルントウ（閩土）は香炉と燭台を望んだのですか。」という発問では、「この発問で神をまつためだとわかり、「私」の願う生活とつなげることができた。」「主人公とルントウ（閩土）の過去のときの周りの環境、名前の由来、銀の首輪などと今望んだものと関係が結びついているのが楽しかった。」という意見があった。また、「香炉と燭台の他にルントウ（閩土）は何を欲しがりましたか。なぜ、それを欲しがったのですか。」という発問では、「本文には明確に書かれていないけど、家族が多い特徴で考察することができた。」という意見があった。

最後に5時間目に行った「不思議な画面の場面と最後の文を比較して、似ているところと、書かれていないことは何ですか。」という発問では、「現在と昔を比べることで、読みがすごく深まった。」「この発問でより、故郷がどんな物語か理解ができた。」「読み解く力を身に付けることができた、深く考えることで、物語の最後につながった。」という意見があった。

## 7. 研究の成果と課題

成果としては、教科書から読み取れることを中心とした全員が参加できる発問、作品の内容や表現、登場人物の生き方の変化や、主人公のものの見方に注目する発問ができたことや、グループワークを通して他人の意見を聞くことで、生徒自身が読み取れなかったところを確認し、再度文章に戻ること、その文章についてもう一度考えさせることができたことが挙げられる。

課題としては、『故郷』という文章が難しく、どうしても基礎的なところを確認したうえで、授業を進める必要があり、文章を読めばすぐにわかるような単純な発問に時間をかけてしまったことで、生徒自身が書かれている文についてそのまま答えるような形になってしまい、生徒が文章を読んで、それについて考えさせる発問や、多様な解釈を生徒から引き出すような発問にまで、時間を費やせなかったこと、各発問を個々で考えてしまい、その発問が物語全体とどのような関連性をもっているのかという視点がなかったために、全体の中で、各発問がどのように機能しているのかを示せなかったことが挙げられる。

## 8. 授業実践、アンケート調査を踏まえて

生徒のアンケートから、考えられることとしては、「整理がしやすい、変化がとらえやすい」発問、「抽象的で、1人では考えにくく、他者と考えたいと思う」発問、「筆者が何を言っているのかが分かる」発問、「答えはないが、多様な解釈が生まれる」発問を授業の中で行う必要がある。

また、発問をする際に、発問を抽象的にするときは、基本的な事（登場人物や、出てきたものなど）を確認してから行うことや、文章全体を通して、どのように関わっていくのかという視点で発問を考えることを心掛けることが大切だと感じた。

## ○参考・引用文献

- ・石川英真（2020）『授業づくりの深め方「よい授業」をデザインするための5つのツボ』ミネルヴァ書房
- ・小林康宏（2022）『中学校国語文学の発問大全』明治図書
- ・寺井正憲・伊崎一夫（2015）『発問 考える授業、言語活動の授業における効果的な発問』東洋館出版社
- ・江川卓ほか編（1990）『増補改訂 新潮世界文学辞典』新潮社
- ・長谷川祥子（2014）文学的文章教材の授業改革の試み—「故郷」を例に— 北海道教育大学学術リポジトリ『語学文学』53巻 21－30
- ・遠藤茜（2018）メディア論の観点を加えて文学教材を扱う授業の開発—鲁迅「故郷」を題材に—『授業実践開発研究』第11巻